

博士論文（要約）

1960年代から1990年代におけるアメリカの進歩主義教育  
—子ども中心主義の系譜の歴史的検討—

橘高 佳恵

本研究は、1960年代から1990年代におけるアメリカ合衆国（以下アメリカ）の進歩主義教育の歴史を描いたものである。なかでも子ども中心主義の系譜に焦点を合わせ、進歩主義教育の子ども中心主義の系譜が1960年代に再興し、1970年代半ばから1980年代というアメリカ保守化の時代においても発展し、1990年代に至って一つの区切りを迎える経緯を明らかにした。

1960年代から1990年代の進歩主義教育において中心的な役割を担ったのが、リリアン・ウェーバー、パトリシア・カリーニ、ヴィト・ペロン、デボラ・マイヤー、ジョセフ・フェザーストーンの五名である。いずれも学校に近い立場に身を置いて、進歩主義教育者のネットワークを中心に支えながら各々特有の活動を展開し、アメリカの公立学校に変容をもたらす。本研究は、1960年代から1990年代における中心的な進歩主義教育者の生み出した実践と理論を明らかにすること、この時期における進歩主義教育者のネットワークを明らかにすること、この時期における進歩主義教育をアメリカの政治社会的文脈を踏まえて描くことの三つを課題とし、五名の活動を辿ることにより、この時期における進歩主義教育の歴史を実践レベルにおいて描いた。ジャーナリストであったフェザーストーンの鋭敏な観察を手がかりに、ウェーバー、カリーニ、マイヤーの各々独自の実践と理論を把握するとともに、1960年代から1990年代における進歩主義教育者の中核的なネットワーク「ノースダコタ評価研究グループ」の創設の経緯と変容の過程を、コーディネーターを務めたペロンの活動とともに跡づけた。そして本研究をとおり、1960年代から1990年代の進歩主義教育における知性と革新性の意味が浮かび上がった。

第一章において、中心的な五名の諸活動およびノースダコタ評価研究グループについて、アメリカの政治社会的文脈におけるそれらの布置を示すことにより、1960年代から1990年代における進歩主義教育の展開を描いた。アメリカがリベラルな空気に包まれ、教育界においては補償教育政策の始動した1960年代半ば、オープン・エデュケーション運動が誕生する。進歩主義教育の子ども中心主義の系譜の再興であり、ウェーバー、カリーニ、ペロンの活動が拠点となった。オープン・エデュケーション運動は、アメリカの保守化にともない1970年代半ばまでに衰退する。しかし中心的な進歩主義教育者は活動を維持し、実践と理論の洗練を重ねる。1970年代から1980年代にかけ、新たな活動としてはマイヤーの学校設立があり、ノースダコタ評価研究グループも発展を続ける。しかし連邦政府の教育政策がスタンダードとアカウンタビリティにもとづくアウトカム重視の改革に転じた1990年代に至り、進歩主義教育は、五名の高齢化や政治的圧力の中で一つの区切りを迎えた。

第二章では、ニューヨーク市ハーレムを拠点に活動を展開したウェーバーの実践とディスコースを明らかにした。ウェーバーは、長く就学前教育に携わったのち、インフォーマル・エデュケーションの研究を決意し渡英する。帰国後はニューヨーク市立大学シティ・カレッジのファカルティとして、「開いた廊下プログラム」、「開いた廊下のためのシティ・カレッジ助言機関」、「オープン・エデュケーションのためのシティ・カレッジ・ワークショップ・センター」を立ち上げ、これらをとおり学校改革に携

わる。特有のインフォーマルの概念に支えられたウェーバーの活動は、孤立の支配する伝統的な公立学校の環境を、就学前のインフォーマルな環境に連続させ接続させてゆこうとするものであり、「混成のグループ」、共同体、言語発達、初等科学、探究などを鍵概念として、既存の公立学校に漸進的な変容をもたらしていた。

第三章では、ヴァーモント州ノースベニントンを拠点に活動を展開したカーニの思想と実践を明らかにした。1965 年、カーニと三名の共同設立者によりプロスペクト・スクールが誕生する。もともと心理学者であり、カリキュラムの検証において心理学的実験を子どもに課していたカーニは、しかし日々の観察をとおり、子どもへのオルタナティブのアプローチを求めるようになる。そして現象学をはじめとする諸学問および文芸にもとづいて、人の「特殊」に迫るアプローチが形成された。一人ひとり特殊であることが人の普遍性であり、制作し、遊び、物語るという普遍的な行為に各人の特殊が表れている。子どもやものごとをよりよく見るための、記述的探究と総称される諸プロセスも編み出され、各地の公立学校教師に実践されるようになる。1979 年、プロスペクト・スクールは「プロスペクト・アーカイヴおよび教育研究センター」に拡大改組され、子どもの作品のコレクションは、プロスペクト・アーカイヴを構成することとなった。

第四章では、ノースダコタ評価研究グループの創設の経緯と変容の過程を、コーディネーターであったペロンの活動とともに明らかにした。1972 年 11 月、ノースダコタ大学において小さなミーティングが開かれる。補償教育政策の展開が標準テストの使用の拡大をもたらす中、ペロンの呼びかけにより、評価をテーマとして開かれたものであり、ウェーバー、カーニ、マイヤーの姿もあった。このミーティングが出席者の希望によって継続し、同時期の進歩主義教育者を引き寄せる中、やがてノースダコタ評価研究グループの名が定着する。1960 年代から 1990 年代における進歩主義教育者の中核的なネットワークが評価をテーマに発足したことは、効率性原理に抵抗する子ども中心主義の系譜の伝統的な姿勢を象徴するものであったと言えよう。

ノースダコタ評価研究グループは、郵送による資料の共有、モノグラフ・シリーズの出版、年次ミーティングの三つを主要な活動として、標準テストに潜む人種民族的バイアスを示すとともに、オルタナティブのアプローチを提示してゆく。また白人の研究者を中心とした初期を経て、1980 年代半ばに教師のプレゼンスの拡大を実現し、さらにマイノリティの人びとのプレゼンスの拡大に取り組む。内側からのさらなる民主化を求めている、この努力の背景には、イタリア系移民の子どもとして国と文化を越境したペロンの経験とその省察があった。

第五章では、1970 年代半ば以降、とりわけ 1980 年代半ば以降その名を知られ、現在も進歩主義のヴィジョンを精力的に発信するマイヤーの学校設立の試みと、それを支える哲学を明らかにした。1960 年代前半に教師となったマイヤーは、ウェーバーに学んだのちセントラル・パーク・イースト小学校を設立する。さらに 1985 年、セントラル・パーク・イースト中等学校を設立する。貧困と差別の問題を抱える都市部において、進歩主義の公立学校を、初等教育段階にとどまらず中等教育段階においても実

現させたのであった。マイヤーの活動を支えたのは、リベラルな家庭および学校環境において育まれた社会主義の姿勢と、教師の専門家としての権利を追求するための組合主義の姿勢である。彼女はこれらの姿勢を踏まえ、すべての構成員が知性を行使できる公教育制度の新たなあり方を追求していた。

1960年代から1990年代の進歩主義教育において、学校教育が知性的であるとは、子どもが学んでゆくにあたり、子どもと教師がともに知性を発揮できるということであった。このとき知性とは、対象世界や他者にかかわり、自身の選択と判断をもって、世界の意味を個性的かつ協同的に創ってゆく働きのことである。そして世界の意味を個性的かつ協同的に創ってゆくことこそが学びである。さらにまた、この時期における進歩主義教育は、実践と理論の往還をとおしての展開の仕方においても知性的であった。

1960年代から1990年代における進歩主義教育の革新性は、既存の制度の変革を追求した点に指摘できた。そして変革の目指したのは、公民権運動の成果の学校そして社会における実質化である。本研究の取り上げた五名にとり、学校改革の展開は、人種民族的および社会経済的に平等な社会の追求と相即であった。そして現状の不平等を認識して制度の変革を志向するということは、まさに知性の働きである。なお制度の変革とは権力関係の組み替えであり、ゆえに革新的であるとは政治的とも表現された。

知性と革新性に関する以上の理解を踏まえ、1960年代から1990年代の進歩主義教育における民主主義のヴィジョンを示すならば、それはすべての人が知性を行使し、同等の権利を有する市民として意思決定に参加できる社会のヴィジョンと行うことができる。公教育において、すべての子どもに個性的かつ協同的な学びが保障されるとともに、民主主義の作法が培われるならば、やがてはすべての人びとが、各々の個性と文化をもってアメリカの現在と未来に参加できるようになる。1960年代から1990年代の進歩主義教育において構想されていたのは、一人ひとりの個性の解放と、それをとおしての社会民主主義のアメリカの実現であった。

最後に、進歩主義教育の子ども中心主義の系譜がなぜ衰退したのかを明らかにすること、1980年代末から1990年代における進歩主義教育の様相を、アメリカの政治社会的状況を踏まえて描くこと、そして進歩主義教育における母的な性質をめぐる検討が今後の課題として残された。